

# KALS NEWSLETTER 55

2017年6月  
九州アメリカ文学会  
事務局 佐賀大学全学教育機構内  
佐賀市本庄町1  
〒840-8502

## Thoughts on the Symposium of the 63rd Annual Kyushu American Literature Society Conference

Greg Bevan (Fukuoka University)

In May of last year I was asked to oversee the Sunday symposium for the 2017 Kyushu American Literature Society annual conference. Honored to be so chosen, I enlisted my colleague and old friend David Farnell of Fukuoka University, who in turn brought into the fold Kyushu newcomer Professor Shingo Nagaoka of Fukuoka Women's University (late of Shimane University). How we settled on *myth* as an organizing theme is more difficult to accurately relate. To be sure, the 2016 presidential election had sent shockwaves through the American consciousness: the fact that a man so contemptuous of truth—a man who had in fact risen to political prominence on the back of an easily debunked lie about a sitting president—could himself be elected was bound to prompt a reassessment of the national soul. Amid newly-mined Orwellianisms like “alternative facts” and “fake news,” the theme of *myth* seemed like an all-too-timely window into the state of the twentieth- to twenty-first-century American literature in which the three of us have been immersed.

But this is not the complete story, since *myth* is a word with a number of meanings, some of them in intriguing tension with each other. Any scholar of literature or ethnography—indeed, any layperson familiar with the story of Oedipus or

Momotaro—understands that these myths are not lies at all, but narratives existing somewhere beyond factual accuracy, stories both less and more than true. As it happened, when I was approached with the symposium idea I was in the first few months of a new research direction, preparing for a book review I had been asked to write on a critical study of the American novelist William T. Vollmann. Of all his works I read, I was in particular seduced by Vollmann’s most recent story collection *Last Stories and Other Stories* (2015), not least because of the way it incorporates mythic elements—from the Mediterranean, Central Europe, Mexico, and Japan as well—into a very postmodern rumination on death and loss. By a seeming coincidence, Prof Nagaoka was at work on a study of the treatment of creation myths in Thomas King’s *Green Grass, Running Water* (1993), a notable work of Native-American fiction. Myth seemed to be in the air, and we had ourselves a theme, and a title: “Myth and Meaning in Postmodern American Fiction.”

But of course the coincidence was more apparent than real, because the free-associating eclecticism of the postmodern movement has made it fertile ground for mythic themes, as writers from Thomas Pynchon to Salman Rushdie attest. Moreover, setting *Green Grass* alongside *Last Stories* made several things apparent: that myth is a versatile tool in providing insight into two works so different, and that with publication dates more than two decades apart—and with King’s novel itself a quarter-century younger than John Barth’s pomo milestone *Lost in the Funhouse* (1968)—the postmodern age has drawn on long enough to justify questions about its continued meaningfulness. Such questions, indeed, are implicitly posed in Vollmann’s most recent fiction.

But it was when Prof Farnell reached back to Barth’s day to retrieve the seminal Philip K. Dick novel *Do Androids Dream of Electric Sheep?* that the full breadth of our theme became clear. Not only do myths not need to be factual to be true, they do not need to be rooted in our collective past—for Dick’s 1968 novel is a work of

science fiction set in a yet-to-come (1990s) America, which nonetheless forges a new mythology, one tied to Christian myths but repurposed for a dystopian future.

It was this sort of renewal that Colin Falck was referring to in his 1989 study *Myth, Truth and Literature: Toward a True Post-Modernism*. Noting that religions had largely given up claims of literal truth for their myths, Falck argued that “our spiritual awareness can begin to be ‘re-mythologized’ through the imaginative insights of poetry or literature.” Falck was taking issue with the more strident post-structuralist critics of his day, and while their particular tide may have ebbed, we are nonetheless left to face a pervasive assumption that the collective wisdom of myth has no purchase on our fragmented world. If the dark ramifications of this mode of thought were apparent in the “post-truth” age to which the 2016 election awakened us, so too does the continued vitality of myth in the work of these three novelists—to say nothing of the enthusiastic participation of our symposium audience—attest to the fact that there are some stories to which we will always return.

## 地区便り

<佐賀地区>

佐賀大学 名本達也

佐賀地区は、組織的な活動は行っていないので、今回は、以下に挙げるお詫び・お願い・お知らせの3点を以って「地区便り」にかえさせていただきたいと思います。

KALSの事務局が佐賀大学に移って2年目になります。5月の九州アメリカ文学会第63回大会を無事に終えることができ、ほっとしているところですが、大会プログラムの会場案内地図に誤った表記があり、会員の皆様を少々混乱させてしまいました。この場を借りてお詫び申し上げます。

それから、こちらは「事務局からのお知らせ」にも掲載されると思いますが、現在事務局は、支部サイト委員から助言を仰ぎつつ、KALSのメーリングリストの稼働に向けて準備を進めております。今後、紙媒体での情報提供は廃止され、こちらの運用をもって、会員の皆様に様々な情報をお届けするようになります。メーリングリストは、登録をした方

にメールが配信される仕組みになっておりますので、できるだけ早い時期に登録をお願い申し上げます。

最後に、お知らせです。今年は佐賀大学が当番校を引き受けたので、本学本庄キャンパスにて「ヘンリー・ジェイムズ研究会」が9月2日（土）、3日（日）の両日に開催されます。ご関心のある方は、名本の方までご連絡下さい。

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

熊本はまだ時々大きく揺れることがあり、一年前のことがフラッシュバックしてきます。少しばかりの揺れには慣れてきましたが、震度3位になると心拍数が上がり、PTSDの症状が出てきます。学生は勿論のこと、教員の方も落ち着きを失くしてしまいます。仮設住宅などで大変な生活を強いられている人たちもまだたくさんいらっしゃるの、何とかこのまま終息してほしいものです。

前回以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。

○135回（2016年12月3日）熊本大学にて

題 目： *The Wild Palms [If I Forgot Thee, Jerusalem]* における自由  
——「悲しみを選ぶ」ということ——

発表者： 有働 牧子（熊本学園大学非常勤講師）

司会者： 池田 志郎（熊本大学）

\*フォークナーの作品を取り上げ、作中の“*Between grief and nothing I will take grief*”をキーフレーズとして分析する発表でした。ラカンやフロムへの言及をしながらの、欲望の意味、自由の意味についての考察は、興味深いものでした。自由と悲しみの関係、悲しみには輪郭があるなど、参加者も引き込まれてしまいました。

また、会場を移して開かれた忘年会も和気あいあい楽しい会となりました。

○136回（2017年2月18日）熊本大学にて

題 目：“*A Whisper in the Dark*”——可視化する声

発表者： 山本 幹樹（熊本大学非常勤講師）

司会者： 池田 志郎（熊本大学）

\*オルコットの作品を取り上げ、「どこまで見ることができるか」の分析でした。*Jane Eyre*や“*The Yellow Wallpaper*”などとの比較もしながらの、主人公はなぜ見ることにこだわったのか、イニシエーションの物語として読むことができる、という発表は素晴らしいものでした。観察者と被観察者、アイデンティティの問題、母親との関係など、たくさんの視点が紹介され、参加者との議論も活発に行われました。

○137回（2017年4月22日）熊本大学にて

題 目： レイモンド・カーヴァーの「大聖堂」の謎

発表者： 池田 志郎（熊本大学）

司会者： 楠元 実子（熊本高等専門学校）

\*「大聖堂」を読みながら、問題となる部分を取り上げ、さまざまな解釈の可能性についての発表でした。多くの部分に取り上げられましたが、参加者からも賛否両論出て、活発な会になりました。

<長崎地区>

県立長崎シーボルト大学 山田健太郎

長崎地区委員の山田です。今回は、長崎地区で新しく会員になられた、長崎大学教育学部の鈴木章能先生をご紹介します。第62回大会で研究発表をされましたので（さらに懇親会もありました）、すでにご存じの方も多いかと思いますが、この場にもご登場いただくことにしました。自己紹介をお願いしたところ、ご快諾いただきましたので、以下に鈴木先生の文章を紹介させていただきます。

はじめまして。長崎大学の鈴木章能でございます。3年前に大阪から長崎に参りました。九州はとても温かな方ばかりで、日々心和む思いでおります。ヘンリー・ミラーやウィリアム・フォークナーを細々と研究しながら、ここ10年余り、貧者に焦点を当てた研究、および比較(世界)文学研究(とくに East-West Studies)を行ってまいりました。East-West Studies は、自分の文学研究を問い、模索した結果、現時点で辿り着いたものです。まだまだ足りない部分ばかりであり、いろいろと学ばせて頂きたいと思っております。何卒宜しくお願い申し上げます。

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

皆さまこんにちは、鹿児島地区の情報をお便りいたします。森孝晴先生（鹿児島国際大学）から、まずは6月に発行される日本ジャック・ロンドン協会の研究誌『ジャック・ロンドン研究』第4号のお知らせです。今回掲載の5論文のうち3論文が鹿児島の研究者お三方によるものとのこと、また6月17日には第25回年次大会が京都で開催され、鹿児島国際大学大学院博士後期課程の院生さんが研究発表を行われます。森先生は25回大会記念シンポジウムの司会を担当されます。同先生の執筆状況については、ロンドンに影響を与えた薩摩武士についてのご論文「長沢鼎の出生と生育について」が『鹿児島国際大学考古学

ミュージアム調査研究報告』14号（2017年3月）に掲載されたばかり、その続編「薩摩藩英国留学生の旅立ちと長沢鼎の運命について」は『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第18巻第1号に掲載が予定されています。またロンドンのエッセイのご翻訳「黄禍論」が『新英米文学研究』第205号に掲載予定と、ますますのご活躍です。小林朋子先生（鹿児島県立短期大学）は『新たなるトニ・モリスン その小説世界を拓く』（金星堂、2017年）の第六章「主人と奴隷の弁証法から逃れる—『ビラヴド』にみる創造的言語行為」を執筆しておられます。10月14・15日はいよいよアメリカ文学学会全国大会が、鹿児島大学で開かれます。前日の10月13日（金）には日本ウィリアム・フォークナー協会の全国大会も同大稲盛会館で開催予定です。皆さまのご来鹿を心よりお待ちしております。

### 事務局からのお知らせ

#### 事務局からのお知らせ

1. 2017年度日本アメリカ文学学会第56回全国大会は10月14～15日、鹿児島大学で開催されます。
2. 日本英文学会第70回九州支部大会は10月21～22日、長崎大学で開催されます。
3. 九州アメリカ文学学会第64回大会は2018年5月12～13日、北九州市立大学で開催されます。
4. 今年度も引き続き学会事務局は佐賀大学に置かれています。

〒840-8502

佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内

九州アメリカ文学会 TEL (0952) 28-8295

会費に関する問い合わせは名本達也 ([namotot@cc.saga-u.ac.jp](mailto:namotot@cc.saga-u.ac.jp))、  
会費以外の件に関する問い合わせは鈴木繁 ([suzukis@cc.saga-u.ac.jp](mailto:suzukis@cc.saga-u.ac.jp))  
までお願いいたします。

(鈴木 繁)

## 2017年度役員・委員名簿

会 長	早瀬 博範 (佐賀大)
顧 問	橋口 保夫
	野口 健司
	野田 壽
	安河内 英光
	山里 勝己 (名桜大)
	小谷 耕二 (九州大)
事 務 局 長	鈴木 繁 (佐賀大)
幹 事	<例会担当> 大島 由起子 (福岡大)
	<例会担当> 下條 恵子 (九州大)
	<大会担当> 高橋 勤 (九州大)
	<九州アメリカ文学賞担当> 高橋 美知子 (福岡大)
	<ニュースレター担当> 銅堂 恵美子 (福岡大)
会 計	名本 達也 (佐賀大)
監 査	秋好 礼子 (福岡大)
編 集 委 員 長	前田 譲治 (北九州市立大)
本 部 代 議 員	早瀬 博範
	鈴木 繁
本部大会運営委員	光富 省吾 (福岡大)
本部編集委員 (支部選出)	渡邊 真理子 (西九州大)
本部サイト運営委員	岡本 太助 (九州大)
編 集 委 員	前田 譲治
	齊藤 園子 (北九州市立大)
	大野 瀬津子 (九州工業大)
	肥川 絹代 (近畿大)
	Scott Pugh (西南学院大)
	David Farnell (福岡大)
	Wayne Arnold (北九州市立大)
地 区 委 員	前田 譲治
	名本 達也
	山田 健太郎 (県立長崎シーボルト大)
	池田 志郎 (熊本大)
	雲 和子 (大分大)
	井崎 浩 (宮崎大)
	千代田 夏夫 (鹿児島大)
	喜納 育江 (琉球大)
支部サイト運営委員	岡本 太助
	藤野 功一 (西南学院大)

## 2017年度年間行事予定

- 3月31日(金) 日本アメリカ文学会第56回全国大会発表者応募締切
- 4月上旬 日本アメリカ文学会第56回全国大会応募者選考
- 4月中旬 九州アメリカ文学会第63回大会プログラム発送
- 4月30日(日) 『九州アメリカ文学』58号原稿応募締切
- 5月13日(土) 九州アメリカ文学会第63回大会(佐賀大学)  
研究発表、総会、講演会、懇親会
- 14日(日) 同上 シンポジウム
- 6月下旬 *KALS NEWSLETTER* 55号発行/発送
- 8月中旬 第1回例会案内発送
- 9月上旬 第1回例会(未定)
- 10月14日(土) 日本アメリカ文学会第56回全国大会(鹿児島大学)
- 15日(日) 同上
- 10月21日(土) 日本英文学会第70回九州支部大会(長崎大学)  
「アメリカ文学部門シンポジウム」
- 22日(日) 同上
- 11月上旬 第2回例会・忘年会の案内発送
- 11月下旬 『九州アメリカ文学』58号発行/発送  
*KALS NEWSLETTER* 56号発行/発送
- 12月上旬 第2回例会(未定)、忘年会
- 2018年
- 2月20日(火) 九州アメリカ文学会第64回大会発表者応募締切
- 2月下旬 九州アメリカ文学会役員会・文学賞選考委員会の案内発送
- 2月20日(火) 九州アメリカ文学賞応募締切  
九州アメリカ文学出版助成金応募締切
- 3月上旬 九州アメリカ文学会役員会(佐賀大学)  
出版助成金選考/九州アメリカ文学会第64回大会発表者決定  
九州アメリカ文学賞選考委員会
- 3月31日(土) 日本アメリカ文学会第57回全国大会発表者応募締切

- 4月上旬 日本アメリカ文学会第57回全国大会応募者選考
- 4月中旬 九州アメリカ文学会第64回大会プログラム発送
- 4月30日(月) 『九州アメリカ文学』59号原稿応募締切
- 5月12日(土) 九州アメリカ文学会第64回大会(北九州市立大学)  
研究発表、総会、講演会、懇親会
- 13日(日) 同上 シンポジウム

## ●KALS 会員用メーリングリストへのご登録のお願い●

前年来、下條恵子先生のご尽力によりまして、メーリングリスト（以下 ML）への会員登録を進めてまいりましたが、今年 5 月からシステムの管理を事務局が引き継ぐことになりました。この ML を、ニューズレターの配信、大会案内、例会案内、災害や列車運休などによる大会・例会の急な変更、また各種学会・文学イベントのお知らせなどに活用したいと考えております。この 5 月に開催された九州アメリカ文学会総会において、2018 年度より上記の案内等はすべて、ML を使って行うことが承認されました。従って、これまで郵送されていたニューズレター、大会や例会案内等が、ML にご登録いただきませんと、来年度以降、皆様のお手元まで届かなくなります。この機会に是非ご登録いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 【登録に関する詳細】

ML への参加方法：管理者の承認が必要。

ML 投稿設定：登録メンバーのみ投稿可、それ以外の投稿は管理者の承認が必要。

### 【登録の手順】簡単です！ぜひご登録をお願いいたします！

1. 以下のメールアドレスに空メールをお送り下さい。送信時のメールアドレスが ML に登録されます。

[join-kalsjapan1955.dIPx@ml.freeml.com](mailto:join-kalsjapan1955.dIPx@ml.freeml.com)

2. 【Freeml】より「ML 参加確認のお知らせ」というメールが届きますので、メール内のリンク先（「参加完了はこちらから」）にアクセスし、メッセージ欄にお名前とご所属を記入の上、「参加承認申請する」のボタンをクリックして下さい。
3. 一週間以内に ML 管理者（KALS 事務局）による承認が行われ、その旨メールが届きます。このメールが届くと登録完了です。一週間以内に承認のメールが届かない場合はお手数ですが、事務局の名本先生までご連絡下さい。（[namotot@cc.saga-u.ac.jp](mailto:namotot@cc.saga-u.ac.jp)）
4. 登録された方は ML のアドレス宛（[kalsjapan1955@freeml.com](mailto:kalsjapan1955@freeml.com)）にメールを投稿することができます。投稿されたメールは ML に登録されている会員の皆さんに送信されます。

（以上、登録方法を解説した文書は、下條先生がご作成くださったものです）